大学出版

'98 秋

No.39

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
39号

Autumn 1998

読書の周辺　江戸の中の李卓吾――中野　三敏　1
読書の周辺　シンガポールの情報政策と二十一世紀――倉橋　英逸　6
第二回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー報告――石井　誠二　11
東京大学出版会における出版物の採算管理――長坂　正幸　13
東海大学出版会の企画の選択と現状――三浦　義博　15
第七回北京国際図書博覧会――山口　雅己　17
歩く・見る・聞く――知のネットワーク　12――18
大学出版部ニュース――20
新刊案内'98・7～'98・9――29

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
〈書籍の価格は本体価格で表示〉

■読書の周辺

江戸の中の李卓吾

中野三敏

「日本近世に於ける李卓吾受用」というのを今年度の講義題目にした。一見、思想史風のテーマだが、江戸時代というのは現代の様に細分化した学問の時代ではないので、これでも国文学のテーマとしても通用する所がありがたい。それは遅れている証拠だという人もあろうが、そもそも古典研究において、遅れているの進んでいるのという方がナンセンスなので、細分化していない分だけ豊かな時代でもある。

これ迄、李卓吾といえば、江戸末期、吉田松陰とからめて論じられるのが通例であった。廣瀬豊氏から溝口雄三氏迄、その成果は我々国文学徒も十分に俾益されてきた所である。加えて『李卓吾評忠義水滸伝』の存在は、江戸中期に遡って、水滸伝受用、ひいては馬琴の『八犬伝』に及ぶ江戸讀本（よろほん）の流れを決定づける要素として理解され、江戸文学研究に従事する者にとっては御馴染みの大名題でもあった。しかし、ありていに言えばそこ迄で、それ以上の関わりは殆ど論及された事がない、と言えば又うそになるので、実は江戸中期の思想界、文芸界に、かの徂徠旋風が一しきり吹き荒れた後、その儒教倫理面からの余りの逸脱ぶりに我慢しきれなくなった反徂徠学派の連中によって、いわば主観唯心論（島田虔次氏『朱子学と陽明学』）とでもいうべき陽明学左派の言説が、恰好の拠り所として援用された際、一方の極として理解されたのが李卓吾の主張であったことは、かく申す小生自身が、数えてみればはや二夕昔ほども前に指摘したことでもあった。但しこれは、以後当の小生自身が、それなりけりに何の結着もつけぬままに放置し、また他の誰一人、その問題は御とりあげにならなかったのは、この活き馬の眼を抜く御時勢に、余程眉唾ものと思われたのでもあろう。その小生が最早来年は定年という歳になってしまったので、ひとまず責任の一端でも果たしておこうかという殊勝な心がけとなったのが、今年の講義にこのような題目をかかげたいきさつと言えば言えよう。

まことに歳月の歩みは馬鹿に出来ぬもので、あの眉唾ものの思いつきも、二十年の間には結構材料も整ってきた。

そうしてみると李卓吾の名前は、本邦近世の知識人にとっては、相当早い内から意識にのぼっていたもので、例の天海僧正の蔵書のうち、叡山眞如蔵旧蔵本の中に、既に卓吾の主要な著書類は、『焚書』・『蔵書』・『続蔵書』・『説書』・『初譚集』と、無論唐本で大方揃っていたようであり、また藤原惺窩門の大儒那波活所は、寛永七年三十六歳の折の「備忘録」に、卓吾編という『開巻一笑』の記事をひいて、中国にも日本と同じような天狗がいるらしいなどとのんびりした事を記し、更にその翌年、家蔵本を列挙した中に『焚書』も入っている。因みに全部で三十九部著録された内に明版は十一部で、『弇州四部稿』や『李滄溟文集』なども見え、天海僧正は別格としても、当時の名流儒者の蔵書の大概がわかるのも面白い。活所の先生にあたる惺窩の場合、刊本『惺窩文集』（承応三年刊）の手簡部を見ると、その殆どが唐本の貸借の記事ばかりといってもよい程で、その中でも明人の雑著類を極めて良く読んでいることがわかる。いわば殆ど同時代の受用であり、日中間のタイム・ラグは予想外に少なかった事が、今更ながら実感させられる。但し残念ながら、今の所『惺窩文集』中には、卓吾の影を見出すこと迄は出来ないでいる。

承応二年には万暦の三高僧の一人と嘔われた雲棲の袾宏の随筆『竹窓随筆』が和刻本として刊行された中に「李卓吾」と題する二条がある。卓吾を「超逸、豪勇」と評した後、それが長所であると共に短所でもあると指摘する辺りが、いかにも穏やかな宗風といわれた袾宏らしい。そしてその所以を、卓吾が始皇帝や馮道を称揚することや、『西廂記』・『拜月記』などの俗文を天下の至文と評価することの当否を以てし、更に総評して卓吾に「人傑」の呼称を与えた上で『大学』の「好人所悪、悪人所好、災必逮夫身」の典型だろうと文を結ぶ。『竹窓随筆』を読んでここに至った、当時の我が国の知識人達で、卓吾の人と為りや思想に興味をかきたてられなかった人は、恐らく極めて少なかったのではないか。自然と『蔵書』・『焚書』といった卓吾の主著へ導かれる標になった事は確かである。しかもこの『竹窓随筆』は、和刻本としては恐らく当時最もよく読まれたものの一つに数えられよう。特に仏者に喜ばれたものであるのは当然だが、以後本邦学僧達の多くが、本書のスタイルで随筆を著わすことが流行する。「随筆」という書名が本邦に定着するのも、本書辺りからではなかったかとも思う。それほど本書の影響は大きかったし、ともかく本邦の学者達の頭に、李卓吾の存在は本書によって十二分に刻みこまれた事は間違いない。

その他、当時のことで言えば、深草の元政上人の蔵書に『焚書』があったことや、やはり明人随筆の白眉として和刻された『五雑組』にも、卓吾を「人妖」と評するなどを挙げることも出来るが、今は暫く措く。特記すべきは、内閣文庫に現蔵される、紛れもない林羅山手記の『李卓吾先生批點四書笑』と題する唐本の写本一冊の存在である。羅

山は明暦三年没ゆえ、それ以前の写である事は動かぬがこの辺りから本邦儒者達は、また卓吾に別の一面を見ることになる。

本書は内題下に「開口世人輯、聞道下士評」とあって、卓吾の名は書名の上に角書きで記されるのみであり、卓吾批點というのが何を指し、どこ迄信頼出来るのかも甚だ心もとないが、ともあれ前出の『開巻一笑』と同じく、当時中国でも、この手の、やや艶笑味を帯びた編著類が、多く卓吾編といった扱いで刊行されていたらしいことは、今ではよく知られた事柄でもある。何しろ『水滸伝』・『西廂記』を初めとする伝奇・院本・雑劇類を「絶仮純眞、最初一念本心」の立場から「古今至文」とほめそやしたのが、卓吾主著の「童心説」の骨子であったのだから、その横流の末端には『四書笑』や『開巻一笑』の如き書物類が多々あったとしても、何の不思議でもなかったろう。ともかく明暦当時、本邦知識人達が、本書を李卓吾の手になるものとする事を疑う余地は殆どなかったといってよい。

『四書笑』大本写本一冊、全百十条余、書名から察し得る通り、「四書」の中の文言を自在に用いて、それを笑話に転じてしまう。話柄は男女の交媾・男色・私姦といった猥雑なものから、諷刺的なもの、単なる駄洒落のレベル迄雑多ではあるが、何れにせよ「宰予昼寝」「割鶏焉用牛刀」「如在其上」「三十而立」等々、ともかく儒を学ぶ者なら誰しも見なれ聞きなれたおごそかな文言ばかりが、思いもかけぬ状況の中にはめこまれて、何とも滑稽な意味に変ってしまう所、まさに破顔一笑、上々の読後感を生む。羅山先生も巻末に自ら感想を朱書して曰く、「羅山子　莞示考之」と。如何なる大儒といえども、いや大儒なればこそ、時には几辺にのびをするのも必要なことだったに違いない。

夫婦交媾　夫嫌其妻陰寛　妻曰、不難　放我在上便緊矣
夫曰　何也　曰　居上不寛

右は「居上不寛」と題する一条。「居上不寛」は『論語』八佾中の語。人の上に立つ者に必要な寛容の徳目を説く。「交媾」は「交合」と同意、カミニイテをウエニイテと訓じた本文の文意はいちいち解説するには及ぶまい。

学徒有父名良臣者　凡遇良臣二字　皆読為爺々　読孟子曰　今之所謂爺々　古之所謂民賊也
此子呼其父耳　百姓亦呼官為爺々　益見此語不謬

右は「良臣」と題する一条。『孟子』告子下の一句「今之所謂良臣　古之所謂民賊也」によるもので、良臣、すなわち能吏というものは、要するに民の方からみれば恐ろしい盗賊の様なものという意。それをつい不断の口癖で「今ノ所謂オトッツアンハ」と訓んでしまったという粗忽話にすぎないのだが、つけ加えられた評語では、農民は苛酷な官吏に対しても「爺々」と呼ぶので、まさに真をうがっているではないか、という諷刺の一条となっている。

このような文章作法を「断章取義」という。章を断ち、義を取るの意。詩文全体の意味や作者の意図に関わらず、その一部分のみを切りとって別の意味に用いること。本邦の東涯先生著『讀詩要領』では「一句二句のことば一章の内にありては義理かくの如く、その一二句を取はなして用ふる時は、格別のことに成るをいふ」と説明される。即ち歴とした作詩・作文の技法でもあるのだが、このようにふざけた用い方も出来る所が面白い。本歌取りとパロディの関係とも言える。羅山先生も大いに面白がってわざわざ写させたものでもあろう。林家の文庫中におかれて塾生達の間でも結構楽しまれたものらしい。羅山没後丁度百年ほどたった宝暦初年、この頃は林家や聖堂の官学が、民間の徂徠学派と最も昵近な間柄になった頃で、林家員長の井上蘭台や、熊本藩儒の秋山玉山など、まるでどちらの学派かわからぬようなくだけぶりを示している頃だが、その蘭台先生が、恐らくこの羅山手沢本を文庫の中で見た挙句、それなら「四書」の代りに当時大流行の『唐詩選』を使ってやってみようかと、気の合った門人達と相談一決、出来上って刊行したのが『唐詩笑』という小本一冊であった。全二十二章、章題にはすべて『選』中の作者名を用い、本文はその作者の詩句を断取する。

魏徵

陰痿者為龍陽之破曰　縱横計不就　駆馬出関門　人生感意気　功名誰復論

變童曰　秋風吹不尽　總是玉関情　国音秋与臭近

魏徵は初唐の人。『選』中には巻首に「述懐」二十聯の一首がとられるが、「縱横…」以下はその二十聯中の有名句、特に「人生…」の一聯は人口に膾炙する。附言の「秋風…」は李白の「子夜呉歌」の句、これ又有名句だが、細注の「秋は臭に通ずる」という辺り、どうもクドい。やはり真似たものはどうしてもクドくなるものらしく、『四書笑』全体と比べても、その猥褻の度を甚しくする。クドさついでに略解すれば、「龍陽之破」は男色の水揚げとでも言う所、それを「陰痿」気味の中年男が無理に行うので「縱横計不就」で、気ばかりあせってうまくいかぬ、そこでくやしまぎれに「人生感意気、功名誰復論」となる。

張若虚

夫妻交接事畢　乃捏其淫具曰　此物高致妙々　春江花月夜　玉戸簾中巻不去

張若虚は呉中の四士の一人と称された唐の有名詩人、その「春江花月夜」は特に著名な作で、書家の法帖などにも「飲中八仙歌」などと共によく用いられる有名作である。これ又ついでながら「淫具」は男根、一息ついて、又、勃然たる様子を「高致妙々」と評したもの。

猥褻とは言え、まるで陰気な所がなくカラッとして壮快

な感さえあるのは、作者蘭台先生の人柄そのものらしい。跋文を寄せた門人の井上金峨によれば、蘭台は底ぬけに明るい人だったという。その金峨による蘭台の日常は

平日善笑　毎僅僕供食　必先笑而後食之
嘗在稠人広坐中笑而不己（『考槃堂漫録』）

という有様であった。しかも「先生婦人ニ近ヅカズ　終身娶ラズ　居恒ニ僧ノ如シ」（吉田篁墩『近聞寓筆』）という。卓吾の病的な潔癖症もよくしられた事だが、この辺り何か似通うものも感じられるものの、ともかく蘭台は明確に本書編纂のヒントを卓吾の『四書笑』に得ている事は、本書中に先述の「居上不寛」の条を引いている事からもわかる。

宝暦三年六月には『四書笑』そのものの和刻刊行の企てもあったことが本居仲間の『割印帳』に明記されており、恐らくこれも羅山手沢本を底本にして、蘭台・金峨辺りが考えたのではなかろうか。結局出板には至らなかったようだが、その二年後には大坂で『開巻一笑』の巻二のみの和刻が実現するので、やはり東西呼応してこの頃、知識人間に一種の卓吾ブームが捲き興っていた形跡がある。その時の卓吾理解は、無論、風流儒者李卓吾といったものであったろう。

『唐詩笑』の刊行は更なる余波を生む。宝暦七年の江戸版『異素六帖』がそれで、今度は『唐詩選』に「百人一首」を加えて断取し、全章吉原の遊びの種々相にかこつけるというもの。趣向といい手際といい、また一段とこなれたものになっている。作者はこれ又井上蘭台門で、後世超売れっ子書家となった沢田東江なので、『唐詩笑』に触発されての所為であるのは言う迄もない。既に文学史上にも有名な作品の事ゆえ、ここにその内容の一端を紹介するにも及ぶまいが、ともあれ『唐詩笑』と『異素六帖』の二作は、共に宝暦年間の江戸に、所謂江戸戯作なるものの正真正銘口火を切った作品である事はまぎれもない事実であり、そのきっかけが李卓吾編と銘うたれた『四書笑』であったという事は、とりも直さず李卓吾を江戸戯作の生みの親と称しても強ち間違いであるとも言われまい。

卓吾の影響はかくして思いもかけぬ方向へと展開していくのだが、このような受用が可能となる段階では、卓吾の本来の面目というべき『蔵書』・『焚書』などに見える主張そのものも十分に理解されているものと考えるのが当然で、その辺りの見通しを述べたのが、実は二十年前の拙論の骨子とする所だったのである。

今、それを証明し補強する為の資料も何がしかは準備することも出来ているが、紙幅の都合もありすべては後日を期したい。

（九州大学教授）

■読書の周辺

シンガポールの情報政策と二十一世紀

倉橋英逸

一　カナダとアメリカ合衆国の情報政策

アメリカ合衆国のクリントン政権は、情報は国の重要な経済資源の一つであり、世界市場と国際競争力にとって、情報の生産・処理・管理・利用の技術はアメリカ合衆国にとって戦略上重要であるとして、一九九三年にいわゆる情報スーパーハイウエーといわれる国家情報基盤（National Information Infrastructure: NII）構想を打ち出した。

このような状況の下で、現在、情報の分野では、アメリカ合衆国は世界をリードし、民間企業はもちろん、政府、医療、教育、文化等のあらゆる分野で、情報技術（Information Technology:IT）が導入されつつある。

カナダも基本的にはアメリカ合衆国と同じ方向をめざしており、筆者には、カナダやアメリカ合衆国の情報分野全体の動向についての知識はないが、一昨年、大学における情報技術を導入した図書館情報学教育の調査のために、カナダ、アメリカ合衆国の大学を訪れたときは、大学の教育・研究に情報技術を導入するために、大学全体が激動の真っ只中にあるという印象をうけた。

国家政策としての情報スーパーハイウエー構想に対する大学の受けとめ方はさまざまであったが、大学の計算機センターは、急速にネットワーク・サービスと利用者支援サービスに移行しており、大学図書館もさまざまな情報技術を導入して、電子メディアによる情報サービスを強化していた。新しい動きとしては、さまざまな情報メディアを統合して、計算機センターと図書館との中間的な情報サービスを提供する機関が大学に設立されていたことであった。

このような情報資源環境の中で、図書館員を含む幅広い情報専門職を養成する図書館情報学教育の中にも各種の情報技術が導入されていた。たとえば、Webの中に科目のシラバス・教材・文献・メール・チャット・テレビ会議等を組み込んだ遠隔教育の方法は次世代の教育方法として大きな可能性をもっており、キャンパス内の授業にも応用できるとして、各大学でこの授業方法の開発が進められていた。

アメリカ合衆国のケロッグ財団は図書館情報学教育のカリキュラム改革のために多くの大学に対して多額の助成を行っていた。大学の教員が授業の中に新しい情報技術を導入することを総合的に支援する教育技術センターが各大学に設置されていたことも特徴的であった。

カナダやアメリカ合衆国などの情報先進国における情報政策は、民間や公共機関における情報技術の開発や導入の指針・調整的な性格が強く、民間主導型の情報政策と思われる。これに対して、シンガポールの情報政策は、以下に述べるように、計画的に進められる政府主導型の情報政策ということができる。

二　シンガポールの情報政策
―インテリジェント・アイランド―

独立してからのシンガポールは、政府の強力な指導力の下に工業化が進められ、驚異的な経済成長を遂げた。政府はその労働力を補うために外国人の就労を認め、一九七〇年には外国人労働力の割合は一一・五％に達した。しかし、一九七九年にはそれまでの労働集約的な産業から資本・技術指向の産業へと方向転換を図った。

この政策により政府は情報技術を早急に導入するために、一九八〇年に閣内に国家コンピュータ化委員会（Committee on National Computerization）を設置した。その後、国を情報化社会に転換するために一九八一年には国家コンピュータ会議（The National Computer Board）を設置し、情報技術を活用する戦略として、一九八五年に国家情報技術計画（National IT Plan）をまとめた。その内容は、①情報技術マンパワー、②情報技術文化、③情報通信インフラストラクチャ、④情報技術の応用、⑤情報技術産業、⑥創造性と企業家精神の風土、⑦調整と協調、であった。

シンガポールの国家発展のために情報技術の力を積極的に利用しようとする経済的な理由は、①経済発展のために外国人労働者に頼ることは社会コストが高くなるので、情報技術の利用により国民の労働生産性を高める必要がある、②国際競争力を高めるためには、すべての産業にわたってコストを下げ、生産やサービスの独自性を高める可能性を秘める情報技術の導入を競争相手より広範囲に革新的に進めなければならない、③情報技術はビジネスの国際化の動脈であり、シンガポールを国際経済に直結させる総合的なビジネス・センターにすることが経済戦略の要の一つである、と考えているからである。

このような背景の中で、国家情報基盤（NII）を構築するために、一九九一年には「インテリジェント・アイランド」（Intelligent Island）をめざした通称ＩＴ二〇〇〇と呼ばれる国家情報政策が発表された。その達成目標は、①世界のビジネス・センターを育成する、②個人の生活の質を高める、③企業の経済推進力を高める、④地域社会の内部と世界とを結ぶ、⑤個人の潜在能力を高める、であり、

情報技術により国際競争力と国民生活を高めようとしたのである。

ＩＴという用語は、Information Technologyの略称であるが、ここでは、単なる情報を処理する技術ではなく、社会全体のあり方を変化させる技術としてとらえられている。

三　シンガポールの図書館政策―学習する国民―

ＩＴ二〇〇〇マスター・プランの具体的な活動分野の一つとして、ライブラリー二〇〇〇レビュー委員会が国全体の図書館システムの全面的な改革案をまとめ、一九九四年に「学習する国民」（Learning Nation）への情報サービスをめざすLibrary 2000と題される勧告が政府に出された。Library 2000のビジョンは、シンガポールの発展を支援するために情報サービスや学習機会を提供する国家的な図書館ネットワークと情報資源センターを通じて国民の学習能力を継続的に拡大することである。

Library 2000の勧告の達成目標は、①適応性のある公共図書館システム、②ボーダーレス図書館ネットワーク、③調整された国家的蔵書構築戦略、④市場原理に基づいた高質サービス、⑤ビジネス界や地域社会との共生と連携、⑥世界の知識への仲介、というように国家戦略としての図書館政策の要素が強い。この目標を達成するための重要な推進力として、①人的資源、②技術、③組織的リーダーシップを挙げており、人材養成の重要性を強調している。この勧告により、図書館員を含む幅広い情報専門職を養成するために、ナンヤン技術大学の応用科学部に情報学科が設置され、また、テマセク・ポリテクニクの情報技術・応用科学部にも情報学科が設置された。

四　シンガポール・ワン
―みんなのために一つのネットワーク―

ＩＴ二〇〇〇マスター・プランに沿って一九九六年から職場・家庭・学校などへ幅広いマルチメディア・サービスを提供するシンガポール・ワン（Singapore ONE: One Network for Everyone）と呼ばれる国家的高性能ネットワークが活動を開始した。シンガポール・ワンは、一九九八年から試行的に、メンバー・サービス、政府、情報、学習、娯楽、ショッピング、金融、ビジネス、などの情報サービスを開始した。

この中の「学習」という項目に、年齢ごとの学習内容が示されており、たとえば、「成人」のところには「オンライン学習環境」と「バーチャル・カレッジ」がある。

シンガポールには、社会の指導者を養成する大学として、従来、シンガポール国立大学が一校あったが、ＩＴ二〇〇〇の構想を実現するための人材養成の場として、一九九一年に新たにナンヤン技術大学が設立された。また、実務的な専門家を養成するポリテクニク（工業専門学校）も四校設立されており、これらの「オンライン学習環境」と「バーチャル・カレッジ」は、テマセク・ポリテクニクとシンガ

ポール・ポリテクニクが一般市民に提供するインターネットによる遠隔教育のコースである。

これらは、一般的なパソコンとブラウザにより、いつでもどこからでも受講でき、一定の資格を得ることができる。しかし、自主学習が前提となっており、学習に対する強い意志と文字によるコミュニケーション能力が要求される。

またシンガポール・ワンの中には、国家コンピュータ会議、国家図書館委員会、国家科学技術会議の協力によってできあがったTiARA（Timely Information for All, Relevant and Affordable）と呼ばれる電子図書館がある。この中には、海外データベース・サービス、図書館サービス、インターネット情報資源、TiARA児童、などの情報サービスがある。

「TiARA児童」には、文化、百科事典、ゲーム／ホビー、一般知識、地理、歴史、文学／物語、数学、科学、書き方、などに関する詳細な学習情報が載せられている。

たとえば、「文学／物語」の事項には、さまざまの児童文学の書名が挙がっており、スティーブンソンの『宝島』を指定すると、著者、内容、関連情報、課題について、それぞれ、著者に関する情報、本の概要・人物・全文、船・海賊・宝物・南洋諸島・その他の関連情報、宝島探検・感想文・小テスト・課題・シラバス・質問欄などを載せており、児童が自主的に学習できるようになっている。

この中には『宝島』に関するすべての情報が系統的に載せられており、語彙も豊富であるので、かなりの文章の理解力・表現力と自主的な学習力を要求され、高学年むきである。しかし、インターネットの中に音声や動画も入力できる環境が整いつつあるので、今後は低学年向きのソフトの開発の可能性も高いと思われる。

従来の図書館における児童サービスには、ストーリーテリングなどがあるが、お話をする個人の感性に依存する傾向が強かった。しかし、このWebによる児童への読書サービスは、そのシステマティックな内容分析と構成により、図書館の児童サービスに新たな可能性を与えると思われる。

五　シンガポールの情報教育―考える学校―

ＩＴ二〇〇〇の構想を実現するための重要な鍵は人材養成である。シンガポール教育省は一九九七年に次世代を担う子どもの教育に焦点を当て、考える学校（Thinking school）をめざす「ＩＴ教育マスタープラン」（The Masterplan for IT in Education）を発表した。これは、二十一世紀の社会の要請に応えるために情報技術を教育の中に統合する青写真である。二十一世紀の社会に要求される能力とは、思考能力（thinking skills）、学習能力（learning skills）、コミュニケーション能力（communication skills）であり、ＩＴに基づいた教育と学習は、これらの能力を育てる戦略と考えられている。このマスタープランは、①学習環境を豊かにし、拡大するために、学校とそれを取り巻く世界との連携の強化、②創造的思考、生

涯学習、社会的責任意識の高揚、③教育における革新的な方法の形成、④教育システムにおける卓越した管理的能力の増進、を目標としている。

この目標を達成するために、カリキュラムと評価、学習情報資源、教員研修、物理的・技術的基盤、の各事項についての具体的な計画を示している。これによると、二〇〇二年までには、カリキュラムの三〇％の時間はコンピュータを使う授業とし、このために、生徒二人に一台のコンピュータを配置する計画を立てている。また、教員に対しても二人に一台のコンピュータを支給し、教員の個人用コンピュータ購入のための補助金を出すことにしている。

ＩＴ教育マスタープランは、シンガポールの教育システムに新しいフロンティアを開くものとして期待されている。シンガポールはコンパクトな小国として、その基盤をすでに整えており、大国に比べ、より速く、より柔軟に対応できるとしている。シンガポールの教育省は、この計画を教師や教育関係者が具体的に実行するための情報をインターネット上に公開している。この計画は、政府の強力な指導のもとに実行に移されているが、教育現場への画一的な情報技術の導入をめざすのではなく、各々の学校の実状に応じた教師の創意工夫による対応が期待されている。

六　むすび

以上、カナダやアメリカ合衆国と対比して、シンガポールの情報政策、図書館政策、シンガポール・ワン、情報教育計画、について述べてきたが、シンガポールで行われているこれらの改革は、未知の情報化社会への転換を図る国家的な実験であり、二十一世紀のシンガポールがどのような社会になり、その教育・学習の方法がどのように変化し、その中でどのような人材が育ち、書物や読書がどのように位置づけられているかが大いに注目されるところである。

（関西大学文学部教授　kurahasi@ipcku.kansai-u.ac.jp）

参考文献

1　倉橋英逸、大城善盛、小松泰信、山本貴子　共著『21世紀の情報専門職をめざして―カナダとアメリカ合衆国の図書館情報学教育と情報環境―』関西大学出版部　一九九八・四　三〇二頁

2　IT2000: A Vision of An Intelligent Island. 〈http://www.ncb.gov.sg/ncb/vision.asp〉 (1998.8.1)

3　Library 2000 Review Committee. Library 2000: Investing in a Learning Nation: Report of the Library 2000 Review Committee. Singapore, SNP Publishers, 1994, 171p.

4　Singapore ONE 〈http://s-one.net.sg/webtop-ng/〉 (1998.8.1)

5　TiARA. 〈http://www.digilib.org.sg/〉 (1998.8.1)

6　Masterplan. 〈http://www.moe.edu.sg/iteducation/masterplan/welcome.htm〉 (1998.8.1)

第２回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー報告

中国・北京外語教学与研究出版社にて
1998年８月27日開催

報告　石井　誠二
（慶應義塾大学出版会・大学出版部協会幹事）

山下　正団長による挨拶（東京大学出版会専務理事・大学出版部協会幹事長）

第二回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーは去る八月二十七日中国・北京市の北京外語教学与研究出版社会議室に於て、中国大学出版社協会二十三名、韓国大学出版部協会十四名に我が日本大学出版部協会十名を加え、開催された。

北京大学出版社彭松建社長の開会挨拶の後、壇上の各国代表団が紹介され、主催国として中国大学出版社協会の高旭貨常務副理事長が挨拶され、その後、日本大学出版部協会山下正団長と韓国大学出版部協会金容徳団長がそれぞれ挨拶に立った。今回のセミナーでは、三カ国計六名の発表が行われた。先ず最初に会場を提供した中国の北京外語教学与研究出版社の李朋文社長が『外語教学と研究出版社の発展の道から見た中国の大学出版社の発展様式』というテーマについて、大変力強く発表された。

内容的には①世界の大学出版社

のいくつかのパターンとわが社の発展の基本状況②図書企画は出版社の命の絆なり③独特な販売パターン④国際協力は成果が多い⑤経営管理・内部体制を強化する発展の道を歩む⑥目標の規定と実施の進路、といった要点にまとめられ、韓国と日本（東京大学出版会・長坂正幸氏と東海大学出版会・三浦義博氏の発表内容は本号で後述されるので、本稿では割愛）の発表とは、かなり次元・内容とも異質なものに感じられた。現在の中国の大学出版社では、いわゆる「学術出版」の売上げシェアーが一〇～二〇パーセントにすぎず、残りの八〇～九〇パーセントは、教科書・テキスト・教材書等が中心で、正に時流とニーズに合致し中国出版社五〇〇社の内一〇〇社を占める大学出版社は毎年売り上げが倍々ゲームで伸びている出版社も多いとの発表に、驚きを隠しきれなかった。

この後、韓国の建国大学出版部・朱弘均出版課長より『韓国の大学出版構造の特性と発展方向』というテーマのもと、①韓国の大学出版部の現況②大学の出版構造の特徴と当面の課題③発展のための提言④おわり、として、大学出版部が大学という保護幕に隠れて目立たない役割と努力をしてきたが、これからは大学の先進化のために大学と大学出版部が同伴者としての、見せる役割を果たさなければならない時点に来ていると強調され、データも含め内容的には地道ながら大いに参考になった。

次に中国の清華大学出版社・李淑江副社長より『清華大学の学科優勢を発揮し、世界的に有名な大学出版社を目指す』とのテーマで、清華大学出版社の①概要②図書構造③出版特徴④運営等を盛り込み、積極的で前向きな発表であった。最後に、北京医科大学・中国協和医科大学連合出版社の陸銀道常務副社長より、『大学出版社の管理について』というテーマに基づき、①目標の選択と発展戦略の作成②システムの統制と人的資源の利用③技術の進歩と技術の整備について述べられ、多角的な視野から経営管理について発表された。時間的な制約もあったが、日本を含め六名の発表の後には活発な質疑も有り、参加者の積極的な姿勢で討議は深まったと思われる。

今回のセミナーは一日というスケジュールの中で、昼食後には、会場を提供した北京・外研社（略称）李社長の案内で社内視察も行われ、日本の大学出版社には無い最新の施設、最先端のコンピュータ室、TVスタジオ等を見学した。

日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナーも今回で第二回となりましたが、それぞれ国の社会体制など異なる中であっても、大学出版部に携わる立場は共通であり、お互い得るものも多かったと思う。最後に三カ国の代表が記念品を交換し、来年韓国での再会を約した。

第二回日本・韓国・中国大学出版部協会合同セミナー　講演（要約）

東京大学出版会における出版物の採算管理

東京大学出版会出版局長　長坂　正幸

今回の三国セミナーで、私に与えられた報告テーマは「大学出版部の経費の出所」と「大学出版部の経営管理の経験」の二点であった。中国でのセミナー会場の様子や運営の仕方、報告時間などはっきりしないこともあったので、どのようにでも対処できるように発言内容をほぼ全文、文章にしておいた。文字数にして約二万字に及ぶ。まともに話をすれば一時間はゆうに超える量である。

当日のセミナーでの報告者は六名（中国3、日本2、韓国1）であったため、時間の制約と三カ国という言葉の問題があり、報告は儀礼的なものにならざるを得なかった。ただ、全文が各国語に翻訳され、冊子になっていたので、最終的にはそれを読んでもらえば意図は理解してもらえるであろうと考えることにした。

私の報告は、与えられた二つのテーマを一緒にして「東京大学出版会における出版物の採算管理」と題し、全三章に分けている。目次を載せておく。

第一章　経営分析と計数管理

1、出版経営の二面性　2、経営分析の必要性

3、数字のとらえ方　4、経営計画

第二章　採算の基本的考え方

1、出版姿勢と生産性　2、採算の判断基準

3、マクロの計算

第三章　採算管理の方法

1、売上・原価・経費　2、部数と定価

3、在庫管理と資金

第一章では、出版の原点は「出したい本があるから出す」ということであり、はじめに「志」があるに相違ないのだが、出版社が企業という形態をとるかぎり企業経営の側面を無視することはできないという当り前の前提をまず確認。その上で経営の判断を合理面で的確にするために、計数把握による経営分析が必要であり、その分析をするに際しての五つのポイントを上げた（詳細略）。また、経営計画においては、成長・安全・収益（収入）の三つのバランスをとりながら、意識して利益を計算することの必要性を指摘している。

第二章では、大学出版部は、出版の生命である企画を保証するために経済的に自立することが必要であり、そのためには企業として採算が取れている状態が必要であるが、大きな利益を目指すべきでなく、余力は良書を刊行するた

めに使うべきであるという基本姿勢を示す。そして、採算の基準を収支ゼロにすることとし、一冊一冊の出版物の採算をできうるかぎり科学的に計算することが重要であるとした。

第三章「採算管理の方法」が、東大出版会独自の考え方で、この報告のメインになる。過去の生産性（頁数と部数）を分析し、実績に基づいて一年間の生産を予測することから始まり、年間にかかる経費を十二に分類し、一点ずつの本に賦課する基準数値を作る作業の概略を述べる。と同時に、原価を固定費と変動費に分けることにより、部数の変化と原価の関係をわかりやすくし、コストダウンの方法に言及した。その上で部数と定価のより合理的な決め方についての考えを述べている。

紙幅の関係でこれ以上詳しく触れないが、詳細は私のレポートを読んでいただきたい（希望者にはコピーを差し上げます）。

この報告は、小部数出版を余儀なくされている大学出版部の学術書採算の工夫を中心に述べたものだが、中国側の報告を聞くかぎり、今の中国では場違いのもののように思えた。経済の拡大が相当なスピードを持って進んでいる中国出版界と、老齢期に入っている日本の出版界では、経営上の共通する問題設定は難しい。中国は十二億の民に対して約五〇〇の出版社、片や日本は一億人に対して約四五〇〇、出版物の飽和度が違う。日本が飽和状態であるのに対し、中国では乾いた砂地に水が染み込むようなものである。極言すれば、今の中国の状態は、初歩的な資本主義的経営手法を用いれば、誰が経営をやってもうまく行くはずである。

現状の中国大学出版部は、教材開発に重点をおき、量的拡大にまっしぐらの感があるが、どこかで学術書を出版するという大学出版部本来の役割に戻る必要性が生じてくるであろう。その時初めて今回の私の報告内容が必要とされると思う。

韓国の大学出版部を取り巻く経済事情と問題意識は、日本と似ているところが多い。組織・経済両面で大学の従属という形が多く、もし、大学出版部として独自性を持とうとするなら、両面、特に人事面での大学からの独立が必要であるように思う。日本の学校法人の大学出版部にも同じことがいえるかもしれない。

三国の共同セミナーは二回目であり、長い歴史のスタートを切ったばかりで、これからその内実を創り上げていくことになる。それぞれの国の状況に違いがあるのは当然であるが、学術専門書を大学出版部が刊行する意義は、今後より増してくるはずである。また、その期待も高まってくるはずである。学術出版を継続・発展させるために、様々な面で、それぞれの経験を交流していくことの必要性は改めて言うまでもなく、それがより活発になることを願っている。

東海大学出版会の企画の選択と現状

東海大学出版会編集課長　三浦　義博

はじめに

「どのような企画を選択するのか」という問いを、東海大学出版会が大学の制度との関連でどのような企画編集活動を展開してきたかという視点から以下に紹介したい。

Ⅰ　東海大学出版会の出版活動小史

東海大学出版会三六年の出版活動は、ほぼ四期に分類することができる。

(1)第一期（助走期）（一九六二～一九六六）東海大学の建学の精神や大学の取り組みを、出版物を通して社会に還元・普及しようとした時期。

(2)第二期（一九六七～一九七四）「海洋科学基礎講座」や「東海大学古典叢書」など、発展を遂げる東海大学の制度的側面と連携し、学術的な出版活動を志向した時期。

(3)第三期（一九七五～一九九一）学術的な出版活動に、教養啓蒙書や図鑑、図説類を付加し、トータルな出版活動を志向した時期。

(4)第四期（一九九二～）大学改革や情報のデジタル化、経済的変動など社会の変化を前に、自己変革を遂げようとしている時期。

Ⅱ　大学の制度と企画の選択

東海大学が教育活動の拠点を「湘南キャンパス」に移したのが一九六三年である。これを機に東海大学は様々な学科の開設と研究機関を設置して今日の総合大学へと発展していく。出版会の創設は一九六二年であり、東海大学の発展と歩調を合わせるかのように講座、テキストや叢書、シリーズを刊行していった。以下に紹介するのは、上記分類の第二期、大学の制度的側面と連携し、学術的な出版企画を採用していった時期のものである。

Ⅱ－1　様々な専門シリーズの企画

(1)「文明研究所シリーズ」（一九六四年刊行開始）

【企画の背景】一九五八年の文明研究所の設置を背景に、学科・研究所の知識と成果の公開を目的として「文明研究所シリーズ」が刊行された。【刊行書目】『西田幾太郎』、『反文明的考察』ほか九点。

「備考」一九九六年度、東海大学の学科再編に伴い、文学部文明学科とかつての「文明研究所シリーズ」の精神性を継承する新たな「文明学叢書」の刊行を共同で計画中。

(2)「東海大学古典叢書」（一九六六年第一回監修者会議）

【企画の背景】東海大学文学部を発信地とし、世界の古典を地域・分野を限定せず、原典対訳で日本の学問

界に提供する。【刊行書目】『ウィトルーウィウス建築書』、『歴史十巻』（二巻）ほか十書目・二六点。

「備考」「東海大学古典叢書」は現在も刊行中である。東海大学出版会が存続する限り営まれる文化事業として、今後も継承されていく。

(3)「海洋科学基礎講座」（一九六八年企画編集）

【企画の背景】一九六二年の海洋学部の開設、一九六七年の研究科の開設、一九六八年の海洋研修船の就航など、海洋学部の活発な活動を背景に、全一三巻の講座として企画された。【刊行書目】『海洋物理』『海洋プランクトン』ほか一一点。

「備考」東海大学出版会は海洋・地球科学の分野に一〇一点の既刊書と、四つの講座・シリーズを持っている。そのきっかけとなったのが「海洋科学基礎講座」である。

Ⅱ－2　企画の選択と大学出版部としての発展

東海大学の制度的な局面から企画の選択を紹介したが、東海大学出版会は一九六二年の創立以来、東海大学の発展と共に、この様な講座やシリーズ企画を採択することによって多くの著者を獲得し、次なる企画が誕生し、一四五〇点の既刊書を刊行してきた。

この傾向はほぼ三〇年間続き、一九九二年に大きな変化に直面する。

最初に現れた変化の一つは教科書売上の大幅な減少である。明らかに大学改革の余波がきたのである。

Ⅲ　大学改革と少子化の狭間で

「大学設置基準の改正省令」が公布されたのは一九九一年であった。いわゆる大学改革である。東海大学では一貫教育の導入、サテライト教育の導入、自己評価制度の導入、完全セメスター制度の導入、学部改編など、次々と改革が進行している。

大学改革が進行する中、東海大学の発展と共に歩んできた出版会もその在り方・方法論が根本的に問われる時期を迎えている。内省と変革の時期を経て、やがて充実の時へと移行するのであろうが、出版の立場から見れば現在が最も経営的に困難な時期であると同時に将来展望が必要な時期でもある。

Ⅳ　まとめに代えて

この困難な状況を乗り越える方策はどこにあるだろうか。この時に東海大学出版会が、大学の制度的な発展とともに企画を採択し、出版活動を展開してきたことを思い返す必要があるだろう。東海大学が発展を遂げた時期とは明らかに様相が異なるが、大学改革を基に東海大学は様々な制度的改革を進めている。新たな状況下でその制度的な変化を取り込みながら、次世代に向けた企画展開が必要とされている時期に、今われわれはいるのであろう。

第七回北京国際図書博覧会

東京大学出版会販売部長　山口　雅己

一九八六年の第一回以来、隔年で開催されてきた北京国際図書博覧会も今年で第七回を数え、北京国際展覧中心を会場に、八月二八日～九月二日の日程で開催された。事務局の発表によると、一八、〇〇〇平米の会場に出展されたブースの総数は六七九（うち電子出版物展示ブースが五二）、参加出版社数は世界三五の国と地域から八八社、展示出版物総数一〇万点、来場者数は一二万人に達したという。

日本・韓国・中国三国セミナー報告でも強調されていることと思うが、「市場経済」化に向けて、中国の出版社（とくに大学出版社）の発展には目覚ましいものがある。例えば中国人民大学出版社では、「今年六月までで、わが社の売上実績はすでに昨年比一五五パーセントとなっている」ことを読者に感謝する「横断幕」をブックフェアの会場に掲げていた。また、外国出版社相手の版権売買が倍増したことも、今回のブックフェアの特筆すべき成果として挙げられている。

日本の大学出版部協会では、三米×三米の単独ブースに、加盟出版部の新刊約一六〇点を展示した。日程の都合で、ブースにいられたのが八月二八日午前中と三〇日全日だけであったのが残念であるが、協会ブースを訪れ、合本目録を所望する図書館関係者や、海外でのディストリビューションや共同出版の企画をもちかける出版社なども多々あり、なかなか実のあるフェアであったとの印象を得た。次回も是非参加したいと思うが、フェア期間中はブースに必ず担当者がいるよう手配することが望まれる。

日本の大学出版部協会は新刊160点展示

第７回北京国際図書博覧会を視察する日本の大学出版部協会参加者

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 12

大きな頭は地元っ子のシンボル

東京大仏を訪ねて

大学を卒業するまで実家のある板橋区某所に住んでいた。そして卒業を機に、職場に近い多摩地区で一人暮らしを始めた。早いもので、もう五年目になる。最近、出身地を聞かれると、よく思いうかぶものがある。実家に住んでいたときにはたいして気にしなかったものだが……。それは何かというと、「東京大仏」のことである。

池袋駅から東武東上線に乗り成増駅で下車、歩くこと十五分。東京大仏は緑豊かな板橋赤塚の地、赤塚山乗蓮寺にある。

このあたりは、板橋区の中でもとりわけ多くの緑が残っている地域で、近隣には区の郷土資料館、美術館、植物園などの文化施設が揃っている。休日を一日満喫することも十分可能だ。また、近くには溜池公園という子供にとって絶好の釣り場もある。小学生の頃は、餌の赤虫を手に友だちと毎日のように通い、その成果を競った。釣りに飽きると池の裏山にある木にみんなでよく登った（正確には山ではなく、赤塚城跡のこと）。この山には木や草がよく繁っていた。私たちはしょっちゅう道なき道を突き進んでみたり、かくれんぼをしたりした（その後サバイバルゲームがブームとなり、この山には中学を卒業するまでお世話になった）。山の向こう側には畑があった。その奥には民家があったように記憶するが、林があって薄暗く、足を踏み入れるのが怖かったのもあって、何があるかを私と友だちは誰も知らなかった。ある時、釣りに飽きてきて私と友だちはいつものように山に登った。そして、ついにみんなの好奇心が恐怖を上まわり、まだ誰も行ったことのない山の向こう側に何があるのか確かめることになった。みんなで畑を越え、おそるおそる山の向こう側にいってみた。すると、いきなり目の前に大仏のでかい頭が現れた。東京大仏を見るのはその時が初めてというわけではなかったのだが、そのとき受けた迫力は、後に見ることになる奈良、鎌倉のときのそれよりもはるかに大きなものだった。きっとこのときだろう、東京大仏の姿と、大きさが、脳裡に焼き付いたのは。

東京大仏

子供のとき、その大きさに圧倒された東京大仏だが、実際にはどれだけ大きかったのか。簡単なデータをあげておこう。

東京大仏
材質　青銅製
重量　三十二トン
座高　八・二メートル（うち頭部三メートル）
蓮台　二・三メートル
基壇　地上二メートル、地下一メートル

東京大仏は、昭和四十九年、赤塚山住職、二十三世正譽隆道が八十八歳にて発願。三年の歳月と延べ三千五百人の手によって昭和五十二年四月に完成した。奈良、鎌倉に次ぐ大きさであり、日本三大仏の一つとされている。

赤塚山乗蓮寺のある板橋区は東京二十三区の北西部に位置し、かつては中山道板橋宿として栄えた。この赤塚山乗蓮寺は将軍家鷹狩りの際の休息所として、幕府から厚く保護された。今でも将軍お食事用の三ツ葉葵高蒔絵の膳が寺宝として残されている。また、境内には大仏の他にも、浅井、織田、豊臣に仕え、最後は伊勢・伊賀三十二万四千石の大名になった藤堂高虎公にまつわる石像をはじめ、いろいろな像があり、とてもありがたい気持ちになることができる。

この数ある石像の中で私の一番のお気に入りは、どんな苦しみもがまんする鬼、その名も「がまんの鬼」だ。この鬼の表情を見ていると多少の苦しみはがまんしようという気になってしまう。とても不思議な像だ。

いつもは静かな境内も、お正月には地元の初詣客で大変な賑わいを見せる。東京大仏にはいつまでも板橋っ子のシンボルであってほしい。

（中央大学出版部・中村知広）

がまんの鬼

東京大仏（赤塚山乗蓮寺）

板橋区赤塚５－28
都営三田線西高島平、東武東上線下赤塚、成増の各駅より徒歩15～20分

大学出版部ニュース

芝野講師を囲んで

▼大学出版部協会夏季研修会

去る九月七日から九日にかけて静岡県御殿場市のNTT御殿場経営研修所において、「一九九八年度大学出版部協会夏季研修会」が開催され、協会加盟出版部から二二大学、六一名が参加しました。

最近、文字を電子的に流通させるための文字コードに関して、日本文藝家協会や東京大学のプロジェクトがマスコミでもたびたび取り上げられています。今年の研修会では、芝野耕司東京外国語大学教授をお呼びし、この文字コードの問題を取り上げました。芝野氏は、国際標準化機構(ISO)文字コード委員会や日本工業規格(JIS)コード委員会の委員長を務めるなど、世界と日本の文字コード体系化の中心的立場におられます。さらに日本語組版の標準化などにも取り組まれるなど、デジタル社会における出版の将来に対し主体的な関わりをされています。

この講演と、翌日編集部会分科会で行われた氏の講義内容を紹介します。

▼文字コードの体系化と漢字文化

現在、書籍雑誌の文字組版はもとより、日本語データベース等、多くの文字がコンピュータの介在によって製作あるいは処理されています。さらにインターネットの電子メールに代表される、ネットワークによる文字流通の量と範囲が急速に広まるにつれて、日本語文字を国際的な枠組みで見直す必要が生じています。

芝野講師は「文字とは何か」「漢字とは何か」の基本的定義から説き始め、文字コードの問題点や日本規格協会で進めているJIS第三、第四水準への取り組みについて解説されました。さらに各界からの指摘や要望に対してオープンであることを強調され、年内に行われる公開レビューに対する協力を要請されました。

当協会にとっても積極的な取り組みの必要性を改めて確認した次第です。

▼編集部会分科会

前日の全体講義に続き、文字コードの世界的な歴史や日本での取り組み、規格の種類、さらに文字同定や包摂の意味とその必要性について、より詳しい講義があり、熱心な質疑応答が行われました。

日頃ワープロ原稿におけるデータ渡しのトラブルや伝統的な活字組版とDTP組版でのギャップを経験している編集者にとって、二日間を通して大変有意義な会であったといえます。

北海道大学図書刊行会

▼片桐千明編著『両生類の発生生物学』（A5判・八四〇〇円）第一級の特色ある研究を、テーマ別に個体発生のクロノロジーに沿って並べ、発生生物学の基本問題と概念が把握できるよう構成。発生研究の将来方向を提示。▼浜忠雄著『ハイチ革命とフランス革命』（A5判・六六〇〇円）「人権宣言」の国は、奴隷制植民地ハイチの革命にどのように反応したか。フランスの史学界永年のタブー「ハイチ革命史」の論述を通して新しいフランス革命像を提示。▼亀井秀雄・松木博編著『朝天虹ヲ吐ク―志賀重昂『在札幌農學校第貳年期中日記』（A5判・七五〇〇円）『日本風景論』の著者＝ナショナリスト志賀の若き日の日記を翻刻・解説。明治知識人の思想・精神形成の軌跡をたどる。日本近代国家の法や組織の制度化と植民地形成に関する基本文献。▼平尾・伊藤・関口・森川編著『アメリカ大企業と労働者―一九二〇年代労務管理史研究』（A5判・七六八〇〇円）主要産業企業の労務政策と労使関係の歴史的経過と特質を個別実証的に把握し、アメリカ労務管理及び労使関係の二〇年代像を確定。

聖学院大学出版会

▼倉松功・近藤勝彦『キリスト教大学の新しい挑戦』（二四〇〇円）二十一世紀を間近にした現在、大学教育のあり方も根本から検討しなおす必要にせまられている。キリスト教大学の学長、あるいは理事として大学運営の責任を負う著者たちが、現代日本における大学教育の意義をキリスト教大学の理念と特質を明らかにしながら論ずる。

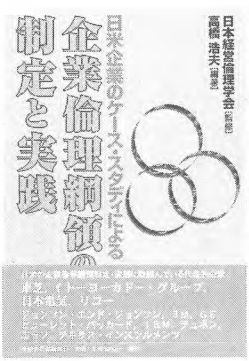
今年、設立一〇周年を迎える聖学院大学の記念出版の一冊として刊行する。類書として、学校伝道研究会編『キリスト教学校の再建』（三四〇〇円）がある。▼倉松功『ルター神学の再検討』（四八〇〇円）宗教改革者M・ルターの神学は戦後、ルター派神学者たちのナチスへの協力などの事実からも、多方面から批判されてきた。著者は、ルター批判の妥当性を承認しつつも、一方で、その神学思想を原史料、時代状況のなかから再検討し、ルター神学の本質と構造を解明している。他方で、その思想が、文化多元主義社会、人権の確立、デモクラシー社会の形成などの現代的課題にどのような有効性をもっているかを明らかにしている。

慶應義塾大学出版会

▼『ケインズ「一般理論」とその理念』（千種義人著、三八〇〇円）は、ケインズ経済学の基本理念の現代的意義を論究する。『「内向の世代」論』（古屋健三著、二八〇〇円）は、戦後文学に本質的な変貌をもたらした「内向の世代」を論じた長編評論。『めまいを治す―生活習慣病として考える―』（神崎仁著、一五〇〇円）は、慶應義塾大学病院長が、増えつづける「原因の特定できないめまい」を生活習慣病という新しい観点から解説。『ニュージーランド入門』（日本ニュージーランド学会編、二二〇〇円）は、ニュージーランド通が政治・経済・文化から日常生活まで〝美しい島国〟のすべてを紹介する。▼〈Keio UP選書〉では、『ふだん着の福澤諭吉』（西川俊作・西澤直子編、二二〇〇円）が、福澤諭吉についてその子や孫が語った日常や、門下生の見聞・追憶を中心に編集、意外な素顔を伝えてくれる。また、『21世紀の医学―最先端技術と人に優しい医療―』（北島政樹・永田守男編、二三〇〇円）は、通信ネットワークを用いた遠隔病理診断や内視鏡下手術など、先端医療技術を紹介する。

産能大学出版部

▼『企業倫理綱領の制定と実践』（日本経営倫理学会監修・高橋浩夫編著、三〇〇〇円）今、企業の倫理問題が各所で話題となっており、大きくクローズアップされている。近年わが国で多発している企業の不祥事は、グローバル化を指向するわが国企業においては、大きなマイナス要因となっており、経営倫理を念頭においた経営活動なしでは、今後、企業の発展はおろか存続すら危ぶまれる事態も起こり得る。本書はこのような状況をふまえ、わが国企業が世界市場で存続、発展するために不可欠な企業倫理綱領制定の実際を、東芝、NEC、リコー、イトーヨーカ堂、エッソ、IBM、3M等の企業の具体的制定事例を取り上げ、その制定方法、内容等を詳説する。



専修大学出版局

▼石倉美智子著『村上春樹サーカス団の行方』（一九〇〇円）現代の小説家の中で村上春樹ほど、発表する作品を待望されている作家もそうは居まい。その中核となる作品をテクストに物語の可能性と現代社会の有り様を考察する本書は、気鋭の研究者がより広汎な読者の受容を期待し、新鮮で読み易い語り口で書いたものである。

▼村上春樹ということで一つ。

先日電車の中でコンピューターの打ち出しと思しき百枚ぐらいの紙の束を繰って読んでいる女子大生らしき人物がいた。何なのかとちらっと横目で見たが、これが上や下にイラストがさり気なく配されて紙面も良くデザインされていて本の頁のようである。中身は、どうも文・村上春樹でイラストが安西水丸のようである。後で知ったが、これがネットワーク上で流されている「村上朝日堂ホームページ」『夢のサーフシティー』らしい。こういうことがあってもおかしくないとは前々から思ってはいたが、いざ巷で当り前のように目撃するようになると、書物の行く末について考えてしまう。

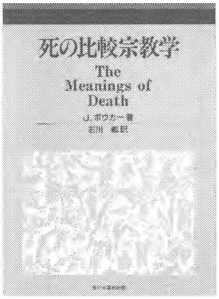
玉川大学出版部

▼間瀬啓允著『生命倫理とエコロジー』（二六〇〇円）

私たちは生きている。けれどもやがて死ぬ。ではどうして〈この私が…〉と考え始めると、答えがみつからず困惑してしまう。〈この私〉は命をもらって生きており、大きな命と結びついて私の小さな命があるからである。共生型の成熟社会をより良く生きるために、人間中心から生命中心の視点への転換が必要だと説く。

▼J・ボウカー著／石川都訳『死の比較宗教学』（四四〇〇円）

古今の大宗教にあらわれた人間にとっての「死」の意味を、生の限界状況、生死の境界で人間を支えうる価値の面から探究してゆく。死をも含めた生の包括的、積極的な解釈は、私たちを現代における生の新たな解釈へと導くであろう。

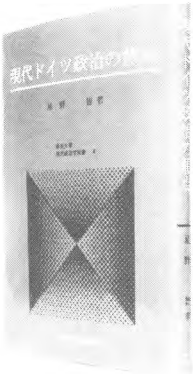


中央大学出版部

▼星野　智著『現代ドイツ政治の焦点』（本体二四〇〇円）

ヨーロッパ統合がいっそう進展していくなかで、ドイツには経済や外交の面でその指導力が期待されている。その反面において、ドイツは東西統一によって自国の「ナショナル・インタレスト」や「アイデンティティ」という問題を生みだした。その意味では、ドイツはヨーロッパ統合と自国の統合という二つの大きな問題に直面している。

本書は、ゼノフォービア（外国人への敵対）、ネオナチあるいは極右主義政党、難民・移民問題、庇護権の制限、安全保障問題、通貨統合、連邦議会選挙といった現代ドイツ政治のかかえるさまざまな課題をクローズアップし、それらが提起している問題点を解明する。



東海大学出版会

▼尚樹啓太郎著『ビザンツ帝国史』（A5判、本体一六〇〇〇円）

ビザンツ帝国の成立から崩壊にいたる激動の歴史を初期・中期・後期の三部構成で検証する。通史に留まらず、政治・経済・文化などの文化的な要素を加え、図表・系図・首長表などを用いてビザンツ文化に総合的な検討を加える。さらにビザンツ時代のギリシア語の発音に留意した地名・人名・事項などの索引にはその現綴りをすべて記載。政治的な経過のみならず、文化的要素を踏まえた視点から総合的に論じられた、わが国初のビザンツ帝国史研究書。

▼太田　充編『**30のキーワードで学ぶ現代経営**』（A5判、本体二〇〇〇円）

日々変貌する現代の経営学に初めて出会い、学ぶ人のための本。「戦略」「組織」「国際」「情報化」「ファイナンス」の五つの領域から、30の専門用語を選び出し、用語の定義・背景・由来・実践例などをわかりやすく解説する。

〝一瞬もとどまらない〟今を生きる企業・社会のありようが目に見えてくる。

東京大学出版会

東京大学では一九五三年以来、春秋二回、公開講座を開催しており、毎回多くの熱心な聴講者を集めている。

『**東京大学**』（蓮實重彦著者代表、四六判、二六〇〇円）は、昨秋行われた第八十八回の講座の内容をもとに編集・製作したもの。

東京大学創立百二十周年を機に、大学院重点化などのさまざまな改革が進む東京大学の多様な側面を、東大スタッフ自らが語る本書は、「東京大学を知る」ための貴重な一冊となった。

〈目次〉東京大学は何であったのか？何であるべきなのか？（立花隆）／「東大闘争」とは何であったのか（船曳建夫）／東大入試と東大生――東大生はどのように生まれるのか？（苅谷剛彦）／文学の中の東（帝）大生（長島弘明）／東大生とスポーツ（平野裕一）／東京大学の「不思議な空間」（岸田省吾）／東京大学コレクション（西野嘉章）／東京大学医学部の過去・現在・未来（加我君孝）／日本の大学の活力――自然科学系を中心に（有馬朗人）／三都大学誌――パリ・ベルリン・東京（樺山紘一）

東京電機大学出版局

ダイオキシン・環境ホルモン・発ガン性物質・酸性雨・エルニーニョ現象等、近ごろ環境に対する話題が豊富である。

水理学においても、「環境水理」という分野で以前より環境に関する研究が行われてきた。しかしこの研究は、単に物質の拡散や流れを扱ったものであった。

近年の環境水理は、ダイオキシンや環境ホルモンに代表される化学・生物学的分野から周辺地域と調和した景観設計に至るまできわめて広範囲にわたっており、この問題は今後ますます研究が盛んになるであろう。

▼有田正光編著『水圏の環境』A5判（本体三四〇〇円）現場や教育の第一線で活躍する執筆者が、水質の基礎知識から最新動向までを平易にまとめたもので、土木工学を学ぶ者のみならず、環境問題に関心がある者にも有益な一冊である。

『水圏の環境』
本体3400円（税別）
A5判・418頁

東京農業大学出版会

▼『モンゴル100の素顔』モンゴル100の素顔編集委員会（本体一五〇〇円）

一般の旅行案内では得られない、モンゴルの情報を提供する目的で編纂されたもの。写真を中心にしているので、視覚的にも十分に楽しめる。文章も平易で短くまとめられている。

モンゴルの人は、日本人によく似ている。或いは、逆に日本人がよく似ているのかもしれない。どちらにしても、モンゴルに行くと、ある種の郷愁を感じるのは、顔が似ていることだけではなく、日本人が捨ててしまった、大切なものを彼らが持ち続けていると感じるからではないだろうか。それは例えば、

「モンゴルの人々の屈託のない笑顔はどこから来るのだろうか……多分、それは大人も子供も一緒になって家族の生活を支えているという連帯感から来るような気がする。家族の中に自分の居場所を持っているという感覚である。そういえば、日本のあの時代にも子供は家族の中で立派な働き手であった」（玉木氏）ということのようである。

法政大学出版局

▼独自の視点から《文明化の理論》を検討し、社会学・民族学・文化人類学に新たな地平を拓いたH・P・デュルのエッセイ集『戸外で朝食を』（藤代幸一訳／二二〇〇円）が刊行されました。その意図と方法を理解するための、著者自身による恰好の入門書です。左記の既刊七点とあわせてご購読下さい。

サテュリコン……二六〇〇円
夢の時……五八〇〇円
再生の女神セドナ……四七〇〇円
神もなく韻律もなく……二九〇〇円
《文明化の過程の神話》シリーズ
裸体とはじらいの文化史……四三〇〇円
秘めごとの文化史……五八〇〇円
性と暴力の文化史……六六〇〇円

▼本年七月三一日より、事務所が左記に移転しましたのでご案内いたします。

〒一〇二―〇〇七三
東京都千代田区九段北三―二―七
法政大学一口坂別館内
編集　TEL〇三―五二一四―五五四一
　　FAX〇三―五二一四―五五四三
営業　TEL〇三―五二一四―五五四〇
　　FAX〇三―五二一四―五五四二

放送大学教育振興会

▼放送大学では、新たに左記の学習センターを設置し、今年十月より学生を受け入れることとなった。

・和歌山学習センター…和歌山市西高松1―7―20（和歌山大学松下会館内）

・徳島学習センター…徳島市川内町平石住吉209―5（㈱徳島健康科学総合センター内）

・佐賀学習センター…佐賀市天神3―2―11（佐賀県立女性センター・佐賀県立生涯学習センター［アバンセ］内）

・鹿児島学習センター…鹿児島市山下町14―50（旧鹿児島県庁舎東別館内）

これで全都道府県に一つの学習センター（東京都は三センター）が配置されるという状態が達成され、すべてのセンターで今年十月より全科履修生を受け入れることになった。

▼七月十日、千葉市ホテルグリーンタワー幕張において、平成十二年度開設改訂予定科目の主任講師会議が開かれた。専任教員・客員教員、ディレクター、編集担当者等が、全体会議、専攻別部会に出席した。これで平成十二年度印刷教材編集作業が正式にスタートした。

明星大学出版部

▼森下恭光・佐々井利夫『増補・道徳教育の研究』（本体一八〇〇円）道徳教育というのは、ことばの広い意味における人間教育である。したがって、それは、人間によって、人間に対して、人間になるためになされる教育である。ということは、人間の存在するすべての場所と時間においてなされる教育であるということになる。そのような道徳教育は、従って、学校という場所で、学校に居る時にのみなされるようなものでないことは明らかである。それにかかわらず、現実に行われる道徳教育は、とくに、現代のわが国においては、学校でこそ行われるべきものと期待されているところがある。そういう誤りを意識しながらも、道徳教育の意義と必要性を説き、学校で指導する道徳教育についてを解説する手引書。

〈目次〉道徳教育の意義と必要性／道徳教育の可能性／発達観と道徳教育／明治以降の道徳教育の展開／子どもの生活と道徳教育／小・中学校における道徳の時間の指導法

早稲田大学出版部

▼シェイクスピアと同時代の喜劇作品を本邦初訳で紹介する〈エリザベス朝喜劇10選第Ⅱ期〉（全10巻）が、⑤『貞淑な娼婦 第二部』（T・デッカー、岡崎凉子訳、二五〇〇円）の配本で完結した。セットでの購読をお薦めする。

▼『体制移行の政治学―イタリアと日本の政治経済変容―』（真柄秀子、五七〇〇円）政治・経済の体制が移行するとき、その変化にどう対応すればよいか。イタリアと日本を比較対照して、経済再編下における政治改革の力学を分析する。

▼『トルストイと日本』（柳富子、五二〇〇円）トルストイは近代日本の知識人にどのような影響を与えてきたのか。森鷗外、芥川龍之介、中里介山等の作品の解読を通して考察する。

名古屋大学出版会

▼阿部泰郎著『湯屋の皇后―中世の性と聖なるもの―』（三八〇〇円）性による疎隔や媒介の亀裂に垣間見られる〈聖なるもの〉を求めて、生成変化する中世の物語・説話、縁起・伝承、図像・芸能の奥深い森に分け入り、その深層構造を明らかにした労作。

▼羽賀祥二著『史蹟論―19世紀日本の地域社会と歴史意識―』（五八〇〇円）十九世紀日本の各地で澎湃として起こった歴史的遺蹟の発掘や考証、記念碑建立の活発な動きを検討することによって、近代の史蹟空間を作り上げた歴史的想像力と文化構造の特質を明らかにした労作。

▼坂行雄監修・佐竹立成編『急性死の症例100―臨床と病理―』（一〇〇〇円）名古屋掖済会病院で剖検された一〇〇症例を選び、症例ごとに専門医の臨床経過と剖検所見、コメントを掲載した。救命救急医療に関わる医療従事者に必携の書。

▼坪井秀人著『声の祝祭―日本近代詩と戦争―』（七六〇〇円）〈声〉と〈書くこと〉の相克の歴史。日本比較文学会五十周年記念大賞受賞。

京都大学学術出版会

▼『Index général de la Correspondance de Marcel Proust』吉川一義他編著・一四〇〇〇円／マルセル・プルーストの遺した膨大な書簡集に登場するすべての人名、地名、作品名を網羅した総索引。日本のプルースト研究家四〇人を総動員して成った世界初の試み。二十世紀初頭のヨーロッパの文学・芸術・社会を知る上でも第一級の一次資料である。（仏文）

▼『小人口世界の人口誌―東南アジア社会論の試み』坪内良博著・四〇〇〇円／豊かな森と海と川が織りなす東南アジアの風土。しかし、ごく最近まで、この地の人口密度は東アジアの五分の一に満たなかった。歴史的な小人口の中に、複雑に入り組んだ生態に生きる人々の、強い移動性と緩やかな社会関係を描き出す。

▼『身体運動における右と左―筋出力における運動制御メカニズム』小田伸午著・五六〇〇円／人が最大限に力を出す場合、両手同時に力を入れると、片手のみの場合に比べて力は落ちる。日常の意識とは相反する、そのメカニズムを中枢系の筋制御から明らかにし、スポーツ科学のあり方を問い直す。平尾誠二氏他推薦。

大阪経済法科大学出版部

▼『科学機器製造業者から精密機器メーカーへ』―一八七〇年～一九三九年における英仏両国の機器産業史―マリ・ウィリアムズ著／永平幸雄ほか訳四三〇〇円

一九世紀以降、産業の発展に伴って科学機器は多様化し、計測機器のように産業の各分野に浸透していく機器も現れ、その発展は、国家や軍事や教育などの社会の歴史と密接に絡み合うことになる。

本書はそのような時期の機器産業経営史を通して科学機器と社会の関わりを追求した希少ともいえる研究書である。

著者マリ・ウィリアムズは、英仏両国を比較することによって、精密機器産業の主要な性格を明らかにし、機器産業の発展における軍事的要請の役割に焦点をあてた。第一次世界大戦とそれに続く軍備拡大競争によって、機器産業に対する国家の介入が強化され、研究開発が進展したことを明らかにした。

本書は大学における科学研究や企業の研究開発および産業業績、国家の政策等の相互の関連性を明らかにし、科学技術政策・経営の歴史に関心のある者にとり興味深いテーマを提供している。

大阪大学出版会

本会単独のホームページアドレスはhttp://www2.books.or.jp/osaka-upとなりました。ぜひアクセスして下さい。▼山川鴻三著『**永遠のロマンチシズム―シェイクスピア、チシアンそしてロマン派―**』A5・四九〇頁・一〇〇〇〇円　シェイクスピア、イギリスロマン派の詩人、十六世紀のイタリアの画家チシアンからなる三者がロマン主義精神の表出という点においていかに密接に関連しあっているかを、キーツ、コウルリッジ、スコットらの数多くの作品群から洞察。シェイクスピア研究に新風を吹き込む。▼川久保勝夫・宮西正宜編『**現代数学序説（Ⅱ）**』A5・二一二頁・二三〇〇円　位相幾何学入門の章ではサッカーボールからオイラーの定理を解説するなど、身近な問題を通じて興味深いトピックスを紹介した現代数学玉手箱、第二弾。▼鬼原俊枝著『**幽微の探究―狩野探幽論**』（一九九八年二月刊）が国華賞を受賞した。これは明治期に岡倉天心が創刊した月刊美術雑誌『国華』の発行元が主催する賞である。美術史研究者にとっても出版元にとっても最高の栄誉である。

関西大学出版部

▼倉橋英逸ほか著『**21世紀の情報専門職をめざして**』（二八〇〇円）本書はカナダとアメリカ合衆国の図書館情報学教育の変化の実態を大学の計算機センターと大学図書館の変革を含めて調査し、21世紀の情報専門職教育の内容と方法の方向性を探ろうとする。▼赤尾勝己著『**生涯学習概論**』（一四〇〇円）海外の生涯学習関連の理論が日本でどう展開され、どのような可能性と課題があるかを明らかにした。全12章で構成。各章とも最近のトレンドを踏まえたシャープな問題意識を満載したコンパクトな入門書となっている。巻末には教育基本法や生涯学習関係法規も掲載。▼北條秀司著『**信濃の一茶・火の女**』（三〇〇〇円）数々の賞を受賞し、文化功労者にも選ばれた著者が、九十歳の卒寿を迎えて書き下ろした「信濃の一茶」は、俳人小林一茶の生涯をユーモラスに描き、演劇界を驚嘆させた。遺稿となった大杉栄の葉山事件を扱った「火の女」（未定稿）も収録。この二つの戯曲のほか、作品上演目録、著書目録を収録し、著者の演劇活動の全容を明らかにする。

九州大学出版会

▼田村馨著『**日本型流通革新の経済分析**』（A5判・二七〇頁・三四〇〇円）戦略分野・商品としての「食」を対象に、都市・環境問題との共生、消費者のコスト負担意識の高揚、新しいルールづくり、風土適合的な戦略展開が要請されていることを示し、ポスト大店法時代が要請する新たな枠組みと流通変革の構図を展望する。▼清水孝純著『**交響する群像―『カラマーゾフの兄弟』を読むⅠ**』（四六判・三〇六頁・三二〇〇円）人間をその関係性においてとらえる、そこにドストエフスキーの文学の本領があるが、それが最高度に発揮されたのが、最晩年の大作『カラマーゾフの兄弟』である。現代的問題を豊かにかかえたこの鬱然たる人間の森を通して交響する、魂の光と闇の対話がここにある。▼木下智見編『New Direction in Transmission Electron Microscopy and Nano-characterization of Materials』（B5判・四〇四頁・一万円）九州大学と日本学術振興会の主催で開催された「透過電子顕微鏡法の新しい動向と材料のナノ構造評価」に関するアジア学術セミナーでの講義と参加者の発表論集。

東北大学出版会

▼足立達著『ミルクの文化誌』(三〇〇〇円)乳食文化は、ウシなどが自らの乳児の哺乳のために分泌するミルクを横取りしてヒトの食糧に転用する思想から開発された。本来は離乳期までの食糧に限定されていたミルクを生涯にわたる食糧としてヒトに開放し、哺乳動物として他に例を見ない異端の食生活がヒトによって産み出されたことになる。本書は乳用家畜の起源から説き起し、ヒトの食糧とはなりえない牧草からの動物性食糧としてのミルクのエネルギー生産性の比類なき高さを評価し、それに基づくミルクの飲用文化の成立と現代の飲用乳生産に至る科学技術発展のプロセスを検証する。まさにミルクの「文化史」が展開されている。

▼森芳三著『昭和初期の経済更生運動と農村計画』(近刊)昭和恐慌の非常時状況で、農村の諸階層、諸団体、諸組織の動向はどうであったのか。その農村動向の一つとして、重要な政治的経済的役割を担った運動が農村経済更生運動であった。本書は、この運動が農民の自力更生運動と政府の経済更生計画の合成であるという分析視点に立つ地域史研究の成果である。

流通経済大学出版会

▼流通経済大学教授大塚祚保著『イギリスの地方政府』(A5・三〇〇頁・三八〇〇円)十月発行

地方自治の根幹は、地域のことは地域の住民の意思で決定することであり、そのための財政的な裏付けがきちんとなされていなければならない、ということである。この観点から見れば、橋本前内閣の地方分権推進委員会の「機関委任事務の廃止」の提言は、わが国における地方自治の拡大に大きく寄与するものと評価される。しかし、地方財政の確立のための具体的な処方箋は示されなかったことは竜頭蛇尾の感をまぬがれない。

英国においては、時を同じくして、スコットランド議会の開設が、高い支持を得て承認され、財政面では同議会に三パーセントまでの所得課税権が与えられたのである。まさに「地方政府」の誕生である。本書は、この英国の地方自治の実態をエセックス・カウンティ、コルチエスター・バラ、ウイベンホウ・タウンについて行った実証的研究の成果であり、わが国の地方自治を考究する人に必読を勧める。

三重大学出版会

▼都築正則／シュテファン・トゥルンマー著『ライン川、ドイツ語の旅』(A4、二一〇〇円)。ドイツ語会話を担当する著者が実際に使えるドイツ語を修得するためにカラー写真・図版をふんだんに盛り込んで編集した教科書。文法のためだけに書かれるような不自然なドイツ語を廃し、意味の取りにくい文には注を付けて翻訳のために使う時間を最小限度に押さえることで、ドイツ語会話という授業の目的に叶った教科書ができあがった。

▼高島慎助著『三重の力石』(A5、二八〇〇円)。三重県発の特殊事例研究。県内をくまなく巡回し、調査した「力石」(力比べのための石)一九五点を写真付きで紹介した調査報告。江戸末期に「力持ち番付」「力石人名簿」の形で広がりを見せた娯楽としての「力比べ」に的を絞り、三重県内の「力石」を調査収集する事で、その娯楽の幅広い浸透ぶりを検証する事例研究。

新刊案内 '98・7～'98・9

■北海道大学図書刊行会
アメリカ大企業と労働者―一九二〇年代労務管理史研究―　平尾武久・伊藤健市・関口定一・森川章編著　七六〇〇円
アメリカ・インディアン史［第三版］　W・T・ヘーガン／西村頼男・野田研一・島川雅史訳　二六〇〇円

■聖学院大学出版会
キリスト教大学の新しい挑戦　倉松功・近藤勝彦　二四〇〇円
ルター神学の再検討　倉松　功　四八〇〇円

■慶應義塾大学出版会
「内向の世代」論　古屋　健三　二八〇〇円
ふだん着の福澤諭吉　西川俊作・西澤直子編　二二〇〇円
ケインズ「一般理論」とその理念　千種　義人　三八〇〇円
めまいを治す―生活習慣病として考える―　神崎　仁　一五〇〇円
家族法　櫻井みや子　二五〇〇円
ニュージーランド入門　日本ニュージーランド学会編　二二〇〇円
資料北朝鮮研究　Ⅰ　政治・思想　小此木政夫監修　八〇〇〇円
日本政治の構造と展開　笠原英彦・玉井清編　二六〇〇円
近代国家の再検討　鷲見誠一・蔭山宏編　二六〇〇円
政治・社会理論のフロンティア　田中宏・大石裕編　二八〇〇円

■産能大学出版部
マーフィー珠玉の名言集　マーフィー理論研究会編著　一六〇〇円
営業は業績評価で変わる　山口　裕　二〇〇〇円
「建設・建築業」普通の会社になりなさい　中井　久史　一八〇〇円
共創時代の商品企画ガイド　神田範明・樋口正美　一七〇〇円
教養としての料理・ワイン・レストラン　内田　増幸　一八〇〇円
VBAプログラミング入門　藤田祐・本間学　二三〇〇円
企業倫理綱領の制定と実践　日本経営倫理学会監修　高橋浩夫編著　三〇〇〇円
管理者のWORD仕事術　ビジネスソフト研究会　一八〇〇円
［ハーバード流］「21世紀経営」4つのコントロール・レバー　R・サイモンズ／中村元一他訳　三二〇〇円
カーネル・サンダース　藤本　隆一　一五〇〇円

■専修大学出版局
村上春樹サーカス団の行方　石倉美智子　一九〇〇円

■玉川大学出版部
シュライアーマッハーの哲学　W・プレーガー／増渕幸男監訳　六四〇〇円
書のすすめ　加藤　僖一　一八〇〇円
日本庶民教育史　石川　謙　七〇〇〇円
京都集書院―福沢諭吉と京都人脈―　多田　建次　三六〇〇円
アメリカの学生と海外留学　バーン編／井上雍雄訳　三八〇〇円
死の比較宗教学　J・ボウカー／石川都訳　四四〇〇円
占領下日本の教科書改革　H・ワンダーリック／土持ゲーリー法一監訳　八〇〇〇円
国際経済の見方・考え方　後藤　基　二七〇〇円
生命倫理とエコロジー　間瀬　啓允　二六〇〇円
学校の選択　クーンズ&シュガーマン／白石裕監訳　五〇〇〇円
文化のダイヤモンド―文化社会学入門―　W・グリスウォルド／小沢一彦訳　三八〇〇円

■中央大学出版部

政治の象徴作用　マーレー・エーデルマン／法貴良一訳　三〇〇〇円
現代ドイツ政治の焦点　星野　智　二四〇〇円
続ドイツ企業法判例の展開　丸山秀平編著　二三〇〇円
国際手続法（中）　山内惟介編著　二三〇〇円
市場経済移行政策と経済発展―現状と課題―　中央大学経済研究所編　二八〇〇円

■東海大学出版会

東海大学マルチメディア医学講演集CD－ROM'98　黒川清・太田保世編　六〇〇〇円
北欧の外交―戦う小国の相克と現実―　武田　龍夫　五〇〇〇円
島の生物学―動物の地理的分布と集団現象―　木元　新作　三五〇〇円
自己決定権と死ぬ権利　立山　龍彦　二二〇〇円
テロリズム―変貌するテロと人間の安全保障―　東海大学平和戦略国際研究所　一八〇〇円
21世紀を知るためのKEY WORD100―人間学の新たな創造―　東海大学教養学部30周年記念論集編集委員会編　二〇〇〇円
30のキーワードで学ぶ現代経営　犬田　充編　二〇〇〇円

■東京大学出版会

丸山眞男講義録　第三冊―政治学一九六〇―　丸山　眞男　三二〇〇円
20世紀システム5　国家の多様性と市場　東京大学社会科学研究所編　三八〇〇円
近世・近代日本の市場構造―「松前鯡」肥料取引の研究―　中西　聡　八〇〇〇円
医療経済学　漆　博雄編　四〇〇〇円
日本型金融システムの転機　大阪市立大学経済研究所・数阪孝志編　四六〇〇円
医薬品情報学〔第2版〕　山崎幹夫・望月眞弓・武立啓子編　四二〇〇円
中国絵画総合図録　続編　戸田禎佑・小川裕充編
1アメリカ・カナダ篇　三二〇〇円
2アジア・ヨーロッパ篇　三二〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇102　国立国会図書館所蔵　一三〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇138　国立国会図書館所蔵　一七〇〇〇円
大日本史料　第十二篇之三十八　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
意図的社会変動の理論―合理的選択理論による分析―〈社会学シリーズ〉　佐藤　嘉倫　西村　美香　三八〇〇円
古細菌の生物学　四五〇〇円
流体力学―安定性と乱流―　古賀洋介・亀倉正博　五四〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇103　神部勉・ドレイジン　四八〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇139　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
大日本史料　第十二篇之三十九　東京大学史料編纂所編　一八〇〇〇円
丸山眞男講義録　第四冊―日本政治思想史一九六四―　丸山　眞男　一二〇〇〇円
20世紀システム3　経済成長Ⅱ　東京大学社会科学研究所編　三四〇〇円
風流能の時代―金春禅鳳とその周辺―　石井　倫子　三八〇〇円
心理学と教育実践の間で　佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭　五四〇〇円
周縁からの中国―民族問題と国家―　毛利　和子　二八〇〇円
現代中国の紛争と法　高見　澤磨　四〇〇〇円
生物教育用語集　日本動物学会・日本植物学会編　七六〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇104　二四〇〇円

帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇140　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
大日本史料　第十二篇之四十　東京大学史料編纂所編　一八〇〇〇円
大日本古文書　編年文書之七―十二　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
■東京電機大学出版局
演習　工業力学　一柳信彦・高久和彦　一三〇〇〇円
学生のためのVisual Basic　若山芳三郎　二二〇〇円
世界を支える日本技術―伝統技術の展開―　小山田了三　一九〇〇円
学生のためのUNIX　山住　直政　二七〇〇円
■東京農業大学出版会
昆虫の行動学　田村　正人　一六〇〇円
モンゴル100の素顔―もうひとつのガイドブック―　東京農大モンゴル100の素顔編集委員会編　一二〇〇円
■法政大学出版局
シオラン対談集　住む　まどろむ　嘘をつく　シオラン／金井裕訳　一五〇〇円
絵画における真理（下）　B・シュトラウス／日中鎮朗訳　三五〇〇円
真理と美―科学における美意識と動機―　J・デリダ／阿部宏慈訳　二六〇〇円
メソポタミア―文字・理性・神々―　S・チャンドラセカール／豊田彰訳　三八〇〇円
神に代わる人間―人生の意味―　J・ボテロ／松島英子訳　三五〇〇円
戸外で朝食を―自身が語るデュルの世界2―　L・フェリー／菊地昌実・白井成雄訳　四七〇〇円
人間の領域―迷宮の岐路Ⅱ―　H・P・デュル／藤代幸一訳　二五〇〇円
核時代のヘーゲル哲学　C・カストリアディス／米山親能・他訳　二二〇〇円
エコロジーの道　H・クロンバッハ／植木哲也訳　四二〇〇円
杖〈ものと人間の文化史88〉　E・ゴールドスミス／大熊昭信訳　六五〇〇円
デカルト読本　矢野　憲一　二八〇〇円
■放送大学教育振興会　湯川佳一郎・小林道夫編　三三〇〇円
■明星大学出版部
増補道徳教育の研究　森下恭光・佐々井利夫　一八〇〇円
■早稲田大学出版部
国別行政改革事情　片岡寛光編　四六〇〇円
体制移行の政治学―イタリアと日本の政治経済変容―　真柄　秀子　五七〇〇円
トルストイと日本　柳　富子　五二〇〇円
スウェーデン・デンマーク福祉用語小辞典　スウェーデン語研究室編　二五〇〇円
大阪外大デンマーク語・スウェーデン語研究室編
ロシア思想史―メシアニズムの系譜―［新装版］　高野　雅之　四二〇〇円
政治思想史講義［新装版］　藤原保信・白石正樹・渋谷浩編　三七〇〇円
シリーズ高齢社会とエイジング（全8巻）第4回配本／第4巻
エイジング・ソサエティ―スウェーデンの経験―　岡沢憲芙・多田葉子　二六〇〇円
水野祐著作集（全10巻）第9回配本／第9巻
通論　日本古代史（Ⅲ）―使譯時代篇―　水野　祐　七六〇〇円
エリザベス朝喜劇10選（第Ⅱ期全10巻）最終回配本／第5巻
貞淑な娼婦　第二部　T・デッカー、岡崎涼子訳　二五〇〇円
■名古屋大学出版会
湯屋の皇后―中世の性と聖なるもの―　阿部　泰郎　三八〇〇円
よくわかる膝関節の病気・ケガ　岩田久監修／長谷川幸治・横江清司　一八〇〇円

史蹟論―19世紀日本の地域社会と歴史意識―　羽賀　祥二　五八〇〇円
急性死の症例100―臨床と病理―　坂行雄監修／佐竹立成編　一〇〇〇〇円

■京都大学学術出版会

自然の機能について〈西洋古典叢書Ⅰ―12〉　ガレノス／種山恭子訳　三〇〇〇円
悲しみの歌／黒海からの手紙〈西洋古典叢書Ⅰ―13〉　オウィディウス／木村健治訳　三八〇〇円
会話の人類学―ブッシュマンの生活世界2―　菅原　和孝　三八〇〇円
異文化との出会い―国際化のなかの個人と社会―　京都大学総合人間学部広報委員会編著　二三〇〇円
小人口世界の人口誌―東南アジアの風土と社会―　坪内　良博　四〇〇〇円
身体運動における右と左―筋出力における運動制御メカニズム―　小田　伸午　五六〇〇円
Index général de la Correspondance de Marcel Proust　吉川一義他編著　一四〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

科学機器製造業者から精密機器メーカーへ―一八七〇～一九三九年における英仏両国の機器産業史―　マリ・ウィリアムズ／永平幸雄・川合葉子・小林正人共訳　四三〇〇円
労働に反抗する労働者―人民戦線期のパリとバルセロナにおける労働―　マイケル・サイドマン／向井喜典ほか訳　四八〇〇円

■大阪大学出版会

■関西大学出版部

生涯学習概論　赤尾　勝己　一四〇〇円
信濃の一茶・火の女　北條　秀司　三〇〇〇円
21世紀の情報専門職をめざして　倉橋英逸ほか　二八〇〇円
イギリス文学の諸相　上山　泰　二五〇〇円
西川祐信集（下）　山本卓解題　二三〇〇〇円
現代社会と環境・開発・文化　橋本征治編著　二六〇〇円
情報社会の理論的探究　野口　宏　三二〇〇円

■九州大学出版会

日本型流通革新の経済分析―日本型流通システムの持続的・選択的変革に向けて―　田村　馨　三四〇〇円
Extensions of Iterative Proportional Fitting Procedure and I-projection Modeling　斎藤　参郎　五四〇〇円
UNIXによるスポーツ統計学　青柳　領　二四〇〇円
交響する群像―『カラマーゾフの兄弟』を読むⅠ―　清水　孝純　三二〇〇円
ドイツ社会民主主義の研究―その伝統は如何にして形成されたか―　木村眞樹男　四二〇〇円
タイプフェイスとタイポグラフィ　白石和也・工藤剛・河地知木　三六〇〇円
New Direction in Transmission Electron Microscopy and Nano-characterization of Materials　木下智見編　一〇〇〇〇円
経済時系列分析再考〈久留米大学経済叢書4〉　原田　康平　三二〇〇円

■東北大学出版会

■流通経済大学出版会

交通学の視点　生田　保夫　三五〇〇円

■三重大学出版会

ライン川、ドイツ語の旅　都築正則／シュテファン.トゥルンマー　二一〇〇円
三重の力石　高島　慎助　二八〇〇円

◉製作の現場から　18

活版時代の文字コード

▼日々のルーチンワークに疲れると、ふと旅に出たくなる。待ってる「こいさん」はいなくとも「包丁一本 晒に巻いて」旅に出られたらどんなにいいだろう。とはいえ、技術らしい技術を持たない編集者稼業では残念ながら、「赤ペン一本 晒に巻いて 旅に出たなら 野垂れ死に」ということにもなりかねない。

▼しかし、われわれの仕事と密接に関連する印刷業界には、かつてそういう世界があった。いわゆる「渡り」の活版職人である。彼らは一定の印刷所に居着くことなく、気が向けば旅に出て、全国どこの印刷所でも働くことが出来た。出版文化が日々伸張してゆく時代にあって、熟練した職人が不足していたということもあるだろう。しかしそれと同時に、彼らが職場を転々とすることが出来たのは、現在のＪＩＳコードに相当するような文字の体系が、活版の時代にも存在したからに他ならない。

▼それは活字棚の配列である。文撰工は棚に書かれた文字を見て活字を探すのではない。ましてや活字の字面を確認したりはしない。目は原稿の文字を追いつつ、手を伸ばせばそこに目的の活字がある。つまりブラインドタッチだった。

「活字棚の構造・並びは、全国どこにいっても、ほぼ同じになっているという。そういうシステムが確立していたからこそ、活版職人は自分の仕事に誇りをもち、ある種の自由を謳歌できた…」（松田哲夫『本とコンピュータ』二号）。

▼現在、ＪＩＳ第三第四水準の制定が進められている。コンピュータという文撰工の体位が極度に向上して、活字棚を大きくしても、手が届くようになったからである。そこで大学出版部協会では、夏季研修会にＪＩＳコード委員会の委員長である芝野耕司先生をお招きして講演を聞いた。その場では特別の質問も異議も出なかったのだが、懇親会の席では、国民総背番号制と勘違いしているのではないかと思われるような、コード化への感覚的な反発も耳にした。

▼おそらく、ＪＩＳそのものに対する誤解がある。ＪＩＳは工業規格であって法律ではない。法律ではないから、第三第四水準が制定されたからといって、表外字が使えなくなるわけではない。「鯨尺を売ってはいけない」というのとは違う。現に印刷所には、ＪＩＳにない文字がいくらでもある。そしてコード化もされている。問題なのは、それが印刷所やシステムごとに、異なるコード体系によって配列されているということだ。

▼現在のパソコンは、マックであれウィンドウズであれ、ドイツ語やフランス語のアクセントを打つことが出来る。ところがこれをテキストに落とすと見事に文字化けする。第一第二水準では足りないから、苦労して作字してくる著者もいるが、当然これは化ける。ワープロに入っている記号類は、各社好き勝手に配列しているから、これまた化ける。Ａ社で組んだデータを使ってＢ社で文庫に組み直したら、化ける可能性がある。

▼このような不合理は一日も早く改善されなければならない。「デジタル化によるテキストの共有」という大きな目標はさておき、著者も編集者も印刷所も、ＪＩＳに登録されていない文字・記号類があまりにも多いため、無駄な努力を強いられていることだけは間違いないのだ。

▼ＪＩＳに登録するための字体の「包摂」規準について、議論が沸騰していることは承知している。それについて述べるほどのスペースも見識もないが、必ずしも国語学者や漢学者が中心になって決めるべきだとは思わない。活字棚の配列は、学者が決めたわけではなく、職人の経験と必要性から生み出されたものだ。工業規格としてのＪＩＳの性格からしても、印刷所や出版社が先頭に立って考えるべき問題を学者だけの責任に帰すべきではない。　（JIS 3D29 4544）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 8 丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田 2 －19－30 TEL. 03-3451-6926　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230　FAX. 03-3263-4239
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-39-8935　FAX. 0427-39-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3－2－7 TEL. 03-5214-5540　FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 042-591-9979　FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町 1　名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-877-1614　FAX. 06-877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-368-1121　FAX. 06-389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2－1－1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777　FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356　FAX. 059-231-1356

大学出版(第39号)'98秋　平成10年10月10日発行　発行所／大学出版部協会
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956
E-MAIL: ajup@lian.com　URL: http://www.lian.com/AJUP/　**頒布価格100円　〒共**